

同時に、科学を信頼する慣習とは別の言説形式を探求する必要もある——客観性の言説形式を傷つけることなく、信頼のおける言説形式を得るために。ウンベルト・マトゥラーナ (Maturana, 1988) は、いわゆる「客観的」というセリフは、すべて、括弧で括られるべきであると述べ、なぜならば、客観性は、限定された空間と人々の間でのみ達成されるものだからだ、と主張している。しかしながら、多様なレトリック形式で表現することによって得られるものは、もっと多いはずである。確かに、客観主義と現実主義の言説が流行してはいるが、それだけが効果的なレトリックの形式ではない。さらに、同じテキストに様々な著述形式を並置することによって、全体に対する単一の声のインパクトは小さくなり、読者(と著者)が続いて参加することのできる対話の数が多くなる。つまり、テキストは、対話の幅を狭めるのではなく、拡大することになる。ヴァン・マーン (Maanen, 1988) は、こうした可能性を、多様な形式のエスノグラフィを提示することによって、実現しようとしている。そこでマーンは、現実主義のエスノグラフィのレトリックの力を、「告白的」エスノグラフィ(一人称による暴露)や「印象派的」エスノグラフィ(想像的な叙述)のそれと対比させている。ラザー (Lather, 1991) は、教育目的のために、彼女の学生に、多様な声で書くことを要求している。つまり、第一に、標準的な実証的分析をし、第二に、実証的分析のイデオロギーの意味を評価し、第三に、もともとのテキストの特徴がいかに社会的に構成されたものであるかを考察する、などのように。ここでは理解可能性が三層に拡張されている。こうした試みは、人間科学にとって、より信頼ができ創造的な未来への有望な第一歩である。

注

[1] 機械としての自己について、より詳しい説明としては、Hollis (1977) の「人間のモデル Model of Man」、Overton and Reese (1973) の「発達モデル: 方法的意味 Models of Development: Methodological Implications」、Gergen (1991b) の「融和する自己 The Saturated Self」を参照。

[2] ヴイトゲンシュタインの「哲学探求」は、心理学の二元論的伝統に対する最も重要な批判の一つである。その他、ウィリアム・ライアンズ (William Lyons) の「内省の消失 The Disappearance of Introspection」、リチャード・ローティの「哲学と自然の鏡 Philosophy and the Mirror of Nature」、ギルバート・ライルの「心の概念 The Concept of Mind」、J・L・オースティンの「知覚

の言語 センズとセンシビリア Sense and Sensibilia) を参照。

[3] この点を詳しく論じたものとして、ライヤンズの「反省の消失 The Disappearance of Introspection」を参照。また、第6章の心的状態のラベリングについての議論も参照。

[4] より詳しくは、第2章を参照。

[5] (3)で特に有益なのは、ロラン・バルトの「S/Z」、ウェイイン・ブース (Wayne Booth) の「フィクションのレトリック The Rhetoric of Fiction」、キヤスリン・ヒューム (Kathryn Hume) の「ファンタジーと模倣 Fantasy and Mimesis」、ジェルジ・ルカーナ (Georg Lukacs) の「ヨーロッパ・リアリズムの研究 Studies in European Realism」、ウォレス・マーティン (Wallace Martin) の「新ナラティブ理論 Recent Theories of Narrative」である。

[6] 社会科学の著作のレトリック分析に関する様々な重要研究については、これまでの章で触れておいた。その他重要なものとして、ハイサーマン (Bazerman) の「書かれた知識を研ぎ澄ませます Shaping Written Knowledge」、ネルソン、メギル、マックロスキー (Nelson, Megill, McCloskey) の「人間科学のレトリック The Rhetoric of Human Sciences」、プレリ (Prelli) の「科学のレトリック A Rhetoric of Science」、シモンズ (Simons) の「人間科学におけるレトリック Rhetoric in the Human Sciences」と「人間科学のレトリック：事例研究 Case studies in the Rhetoric in Human Sciences」、スペンス (Spence) の「プロトタイプのメタファー The Freudian Metaphor」、エドモンソン (Edmondson) の「社会学のレトリック Rhetoric in Sociology」、グリーン (Green) の「文学の方法と社会学理論 Literary Method and Sociological Theory」がある。Lang (1990) における哲学的著作のレトリック分析も、重要である。

[7] 主観言語と客観言語の区別、および、その科学的認識論への含意について、より詳しくは、Bar-Tal and Kruglanski (1988) の「知識の社会心理学 The Social Psychology of Knowledge」所収の私の論文「知識と社会的過程 Knowledge and Social Process」を参照。

[8] これと関連して、前章の、「誰もが知っていること」の焼き直しを避けようとする実証的心理学者の試みについての議論を参照。

[9] (3)での議論を通じて、より詳しくは、リチャード・ローティの「哲学と自然の鏡 Philosophy and the Mirror of Nature」を参照。

[10] (3)での議論は、ヴァインセント・クラパンツァーノ (Vincent Crapanzano) の「クルメスのシレンマ：エスノグラフィーにおける破壊の隠蔽 Hermes, Dilemma: The Masking of Subversion in Ethnographic Description」(『文化を語る Writing Culture』所収) に負っている。

[11] 心理学における実験被験者の構成についての科学的的方法論の影響について、より詳しくは、Danziger (1991) を参照。

[12] 主客二元論の呪縛を逃れるために、ドナルド・マックロスキー Donald McCloskey (私名) は、「共観的」という語を用いている。彼によれば、科学的記述は、客観的でも主観的でもなく、本質的に共同主観的なものである。

[13] この点について、さらなる議論としては Ibanez (1991) を参照。また、客観性の概念に対するフェミニズムからの批判として、Hawkesworth (1992) を参照。

第三部——「自己」概念から「関係性」概念へ

## 第8章 社会生活における「自己についての語り」

実践の可能性を広げるために、理論的言説を豊かにすることは、社会構成主義の中心的課題の一つである。さて、社会構成主義というメタ理論と緊密な関係にある理論は、「関係性理論 (relational theory)」である。関係性理論とは、「頭の中の知識」という常識を超えて、「関係性が現実を作る」ことを主張する理論的立場である。本章では、関係性理論の立場から、自己概念について論じる。すなわち、自己概念を、個人についての私的な認知構造としてではなく、自己についての言説——人との関係の中で用いられる言語的遂行——として捉える。言い換えれば、従来の概念カテゴリー (自己概念、スキーマ、自尊心) に代えて、進行中の関係性の中で理解可能となる「自己についての語り (narrative)」に注目する。

「自己についての語り」とは、自己についての多くの物語を集大成した、一つの物語である。われわれの多くは、子供時代に物語と出会う。まず、おとぎ話、民話、家族の物語を通して、人間の行為がどのように説明されるかを教わる。その後も続けて、小説、伝記、歴史を読んで物語に夢中になったり、映画館で、劇場で、テレビで、物語に心を惹かれたりする。このように、われわれは、幼少期以来、常に物語に接しており、それゆえ、物語は、社会の中で自分身を理解可能にする重要な手段となる。われわれは、幼年時代、家族関係、学校時代、初恋のこと、研究のことについて、様々な物語を語る。あるいは、昨夜のパーティー、今朝の事象、友達とのランチなどについても物語るし、出勤途中にあわや衝突しそうなことや、昨夜夕食を魚がしてしまったことについての物語さえ語る。いずれの

場合も、われわれは、他者や自分自身に対して、物語を用いて自分自身を披瀝している。このように、西洋においては、物語はきわめて広く行きわたっている。そのため、ブルナー (Bruner, 1986) は、語りを理解する傾向が生まれつき備わっているとさえ示唆したほどである。われわれとしても、生物学的基盤の有無はともかくとして、物語がわれわれの生活の中で重要であること、物語がわれわれを理解可能にしてくれることを過小評価するわけにはいかない。

しかし、物語はわれわれを理解可能にする、と言っただけではまだ不十分である。なぜならば、われわれは自分の人生を物語として語るだけでなく、物語において他者との関係性を生きているからだ。例えば、ホワイトとエプストン (White and Epston, 1990) は、「人々は、自分たちの経験を物語ることによって、自分たちの人生と他者との関係性に意味を与えている」(p.13)と述べている。ニーチェは、理想的な生活とは、理想的な物語——すべての行為が、無駄なく緊密に結びついている物語——と一致する生活のことであると述べている (Nehamas, 1985)。ハーディ (Hardy, 1968) は、より説得的に、「われわれは、語りの中で夢を見、語りの中で空想にふけり、語りによって思い出し、予期し、希望し、絶望し、信じ、疑い、計画し、修正し、批判し、建設し、噂をし、学び、憎み、愛する」(p.5)と述べている。マッキンタイア (MacIntyre, 1984) は、こうした観点を洗練させ、演じられる物語が道徳性の基盤を形成すると主張している。さらに、私は、ミンク (Mink, 1989) と同様、「人生とは語りそのものである」と主張したい。物語は、つまるところ記述の形式である。物語を記述対象と等値することは誤りである。語りは、社会的行為の中に埋め込まれている——語りは、様々な事象を観察可能にし、未来の事象への期待を顕在化させる。日常生活における事象は、語りで満たされているがゆえに、意味に満ちている——事象は、語りによって「始まり」「どん底」「クライマックス」「終わり」などの意味を与えられ、現実となる。人々は語りを通して事象を体験し、まさに語りを通して他者とともに事象を整理しているのだ。このことは、人生が物語のコピーであると言っているのではない。そうではなくて、物語は、人生の現実を作り上げる手段となる、ということである。重要なことは、われわれが物語によって生きているということである——「自己」を語るといふ意味でも、自己を実現するといふ意味でも。

本章では、物語——語られる物語と、社会生活の中で生きられる物語——の性質について検討していく。まず、物語の形式、より正確に言えば、語りの構造について検討する。次に、「自己についての語り」が、社会生活の中でいか

に構成され、用いられているかについて考察する。この考察を通して、「自己についての語り」とは、個人の所有物ではなく、関係性の所有物——社会的交流の産物——であることを明らかにする。実際、常に一貫した自己であるということは、ユニークで自律した主体であることを意味するのではなく、相互依存性の中に浸っていることを意味するのだ。

### 第1節 「自己についての語り」の性質

小説、哲学、心理学の著作の中では、人間の意識は、絶え間ない流れとして描写されることが多い。われわれが直面するのは、断片的なスナップショットではなく、進行中のプロセスである、というわけだ。同様に、自己や他者をめぐるわれわれの経験は、バラバラの瞬間がデタラメに並べられたものではなく、目標をもつ一貫した流れであるように思われる。実際、多くの歴史家が示唆してきたように、人間の行為を時間の連なりに埋め込むことなく記述することは、ほとんど不可能である。行為を理解することは、先行事象と後続事象の文脈に行為を位置づけることにほかならないからだ。より明確に言えば、いかなる瞬間における自己概念も、自分自身の過去や未来と何らかの形で結びついていなければ、根本的に無意味である。例えば、自分自身をいきなり「攻撃的」「詩的」「コントロール不能」ととみなすなど、奇妙で不可解であろう。しかし、攻撃が、根深い敵意の後に続くならば、攻撃的であるということは理解可能になる。同様に、「詩的」であるとか「コントロール不能」であるということも、われわれ自身の個人史に位置づけられてはじめて理解可能となる。このことから、多くの論者が、人間行為の理解は、語りという基盤がなければほとんど不可能であると結論している (MacIntyre, 1981; Mink, 1969; Sarbin, 1986)。つまり、「自己についての語り」という語は、自己に関連する時系列的な事象間の関係についての個人の説明を指す。「自己についての語り」を展開する中で、われわれは、事象の間に一貫した結びつきを確立する (Cohler, 1982; Kohli, 1981)。すなわち、われわれは、自分自身の生活を単に「次々と様々なことが起こる」と見るのではなく、一つの物語を形成しているのである——

—そこでは、生活上の事象が、系統的に関係づけられ、連の「展開中のプロセス」に位置づけられることによって理解可能となる (de Waele and Harre, 1976)。つまり、われわれのアイデンティティは、神秘的な突然の事象ではなく、ライフストーリーの産物なのである。ベッテルハイム (Betheim, 1976) が論じているように、このような語りの構成は、生活に意味と方向性を与える。

議論を先に進める前に、「自己についての語り」の概念と、関連する理論概念との関係を明らかにしておこう。「自己についての語り」の概念は、特に、他の領域で発展してきた様々な概念と密接な関係にある。まず、認知心理学における、「スクリプト」(Schenk and Abelson, 1977)、「物語スキーム」(Mandler, 1984)、「予測可能性樹状図」(Kelly and Keil, 1985)、「語理的思考」(Britton and Pellegrini, 1980)の概念は、すべて、時系列的な行為の流れを理解し方向づける心理学的メカニズムを記述する概念として用いられている。認知主義が普遍的な認知過程を探求するのは対照的に、規則・役割理論 (Harté and Secord, 1972など) や構成主義 (例えば Mancuso and Sabin (1983) の「物語の文法」を参照) は、様々な心理状態の文化依存性を強調する。ここでは、個人の行為が語りを基盤とするという認知心理学の前提は維持されているが、そうした語りの社会文化的基盤により注意が向けられている。ブルーナー (Bruner, 1986; 1990) による語りの研究は、これら両者の中間に位置づけることができる——すなわち、普遍的な認知機能という観点を保持するとともに、文化的な意味のシステムをも強調してもいる。現象学 (Polkinghorne, 1988; Carr, 1984; Josselson and Lieblich, 1993を参照)・実存主義 (Charne (1984) によるサルトルの分析を参照)・観相学 (McAdams, 1993) もまた、個人の内的過程 (しばしば「経験」と呼ばれる) に関心を払っているが、個人の内的過程が行動を決定しコントロールするという認知主義的見解には否定的である。そして、物語作者や行為者としての自己という、人間としての能動性を強調する——人間が文化によって規定されるという観点はとらない。

しかし、個人を強調するこれらのアプローチを、われわれは否定する。「自己についての語り」とは、社会的説明ないし公的言説の形式である。この意味で、語りは会話を構成する資源であり、いかなる会話が構成されるかは、相互作用の進展とともに絶え間なく変化する。ここに想定されている人間像は、内的スクリプト、認知構造、統覚作用から情報や行動指針を得るような人間ではない。また、語りというレンズを通して「現実世界を読む」人間でもないし、



自分自身の人生を記述する著者でもない。そうではなくて、「自己についての語り」は、言語的な遂行であり、その遂行は、慣習的な行為の連鎖の中に埋め込まれているとともに、関係性の中で進展し、様々な行為を支持し、強化し、抑制する。また、語りは、未来の行為を指示する言語的営みでもある。ただし、語りそのものが未来の行為の原因や決定要因になるわけではない。この意味で、「自己についての語り」は、社会の中で、歴史伝承や教訓話のような機能を果たす。すなわち、「自己についての語り」は、自己同一化、自己正当化、自己批判、社会的団結のような社会的目的を実現するための文化的資源である。こうしたわれわれのアプローチは、語りの構成の社会的起源を強調する立場と軌を一にしているが、文化決定論を支持しない点、すなわち、われわれが語りのスキルを獲得するのは、文化によって規定されるのではなく、他者との相互作用を通じてであると考えている点が異なる。また、われわれのアプローチは、語りにおける人間の能動性を重視する立場とも近いが、自己決定的な自我を強調するのではなく、社会的交流を強調する点が異なる。

語りに関心をもつ研究者は、語りの真偽の問題に関して、明確に二分される。すなわち、多くの研究者は、語りは事実を反映すると考えているが、研究者の中には、語りは現実を反映するのではなく、現実を構成すると主張する者もいる。前者は、語りが事実によって作られると考えているのに対して、後者は、語りが事実を組織化し、事実を作り上げるとさえ考えている。言うまでもなく、歴史家、伝記作家、経験主義者のほとんどは、語りの事実反映性を強調している。認知主義者の多くもまた、語りの事実反映性を支持しているが、それは、認知が適応的であるという前提と整合的だからだ。例えば、シヤンクとアベルソン (Schank and Abelson, 1977) の言う「レストラン・スクリプト」をもっていることは、レストランという場で適応的に行動するための備えとなる、というわけだ。しかし、前章までの議論から明らかのように、社会構成主義のアプローチは、こうした観点とは対立する。もちろん、事象の記述には制約があるが、その制約は、行為者の心由来するのではないし、事象そのものに由来するのではない。そうではなくて、物語は、科学においても、日常生活においても、人々が進行中の関係の中で利用する共同の資源なのである。社会構成主義の立場からすれば、語りは「そこにある現実」を作りこそすれ、反映などしない。「事実を語る」ことが理解可能な活動であるのは、既存の語りの形式があるからだ。以下、このことについて詳しく論じていこう。

## 第2節 語りの構造化

上述のように、語りが認知によっても世界そのものによっても規定されないならば、語りの特性や形式はどのように説明できるだろうか？ 社会構成主義の立場からすると、語りの特性は、文化と歴史に根ざしている。すなわち、それは、人々が言説を通じて関係を作ろうとすることの副産物である。ちょうど、描画スタイルが芸術家コミュニティの相互調整機能を果たしたり、ある作戦とそれへの対抗策が様々なスポーツで流行するようなものだ。この点に関して、ホワイト (White, 1973) による歴史書の文学的特徴についての分析は示唆に富む。ホワイトは、十九世紀初頭の歴史記述には、事実を記述するための少なくとも四種類の語り形式が見出せることを示している。しかし、十九世紀後半になると、これらの語り形式は廃れてしまい、過去を解釈する別の語り形式が登場した。このことは、語りの形式が、歴史相対的であることを意味している。

この文脈で、現代における語りの慣習を検討してみよう。今日の西洋文化において物語が理解可能となるには、どのような要件が満たされねばならないのだろうか？ この問題は、われわれにとって特に重要である。なぜならば、物語を構成する慣習を説明できれば、自己同一性の限界についても明らかにできるからである。すなわち、語りが文化の中でいかに構造化されているかを理解できれば、自己同一性という語りの産物がどのように構造化されているのかも理解できるし、能動的主体としての自己同一性の限界も明らかにになる。さらに、「事実を語っている」との信頼を得るためには、語りがいかなる形式であるべきかも明らかにになる。こうした適切な語り形式は、それについて「事実が語られる」事象に先立って存在している。もし、語りが慣習的形式に基づかないならば、そもそもその語りは意味をなさない。つまり、事実についての語りは、事実に基づいていてのではなく、大部分、語りの慣習の既存構造化に支配されている。

これまでも、語りの特徴を明らかにしようとする多くの試みが、文芸理論 (Frye, 1957; Scholes and Kellogg, 1966; Martin, 1987)、記号論 (Propp, 1968; Rimmon-Kenan, 1983)、歴史記述 (Mink, 1969; Gallie, 1964)、社会科学 (Labov,

1982; Sutton-Smith, 1979; Mandler, 1984) などの領域でなされてきた。私の試みは、これら様々な研究に立脚したものである。すなわち、これらの研究はいくつかの特徴(観点、性格と行為の機能、詩的修飾、など)によって区別できるが、私は、こうした区別を超えて存在する共通項を拾い上げ、物語が方向性をもったドラマとみなされるための条件を明らかにしたい。一方、私の立場は、普遍性を認めない点で、これら先行研究の多くとは異なる。すなわち、理論家は、しばしば、語りには普遍的な基本的特徴や基本的規則があると主張する。しかし、本書では、語りの構成は歴史と文化に依存していると考ええる。以下に示す六つの基準は、現代文化において語りが理解可能であるために、特に必要となるものである。

### (一) 価値ある終点を明確にする

受容可能な物語は、まず、「ゴール」「説明される対象」「到達すべき状態と避けるべき状態」「重要な結果」、より平たく言えば、「終点」を明確にしなければならない。例えば、「北へ二ブロック歩く」「東へ二ブロック歩く」「それからバイン通りを左に曲がる」とつなげてても無意味だが、もし、この記述が「手ごろなアパートを見つける」という終点につながるものであれば、受容可能な物語になるだろう。選択された終点には、普通、価値が込められている。すなわち、終点は、望ましいもの(ないし、望ましくないもの)として理解される。例えば、終点になるのは、主人公の幸福(「どうやって死を免れたか」)、貴重なものの発見(「どうやって本当の父親を見つけたか」、個人的な損失(「どうして仕事を失ったか」)、などである。つまり、もし、物語が、バイン通り四〇四番地を発見することで終わるならば、それは無意味なものになってしまふ。しかし、非常に望ましいアパートをうまく見つけることができた場合には、よい物語になる。このことと関連して、マッキンタイア(Mackintyre, 1984)は、「語りは、評価的枠組みを必要とする——その枠組みの中で、よい(ないし、悪い)人物が不幸な(ないし、幸福な)結末を迎える、というような」(P.456)と述べている。さらに、終点が価値を担うならば、物語の中には、自ずと、文化的要素——伝統的には、「主観的バイアス」と呼ばれる——が入ってくることも、また明らかである。人生物語は、独立した事象が集まってできたものではないし、事象そのものからはそれが終点となるかどうかは決定できない。むしろ、事象を分節化し、それ

を終点として位置づけることは、文化に固有の存在論や価値に依存している。例えば、言葉の技巧によって、「彼女の指が彼の袖に軽くふれた」は一つの事象となるし、物語に依存して、ロマンスのはじまりとして理解されることもある。終わりとして理解されることもあれば、終わりとして理解されることもある。さらに、事象そのものには、固有の価値はない。例えば、火そのものは、よいとも悪いとも言えない。火の価値は、語りの中で、われわれがそれに価値ある役割を付与する（調理する）か、しない（キッチンを破壊する）かによって決まる。すなわち、「価値ある事象」が理解可能かどうかは、文化相対的なのだ。

### (2) 終点にとっての関連事象を選択する

終点が明確になれば、その物語に関係する事象の種類は多かれ少なかれ制限され、「事象らしさ」をもつものが無数の候補の中から絞り込まれる。理解可能な物語とは、終点をもっともらしく、達成可能で、重要で、鮮明にするような事象が連なっている物語である。例えば、物語がサッカーの試合の勝利についてのものではあれば（「いかにしてわれわれは試合に勝ったか」）、最も関連する事象は、その目標を近づけたり遠ざけたりする事象である（「トムの最初のシュートはゴールポストに跳ね返されたが、次の攻撃では、ヘディングでボールをゴールにねじ込んだ」、のように）。十五世紀の修道士の生活や、未来の宇宙旅行への希望について紹介することは、それらが試合に勝つことと関連していること（「ジュアンは、十五世紀の宗教的実践を読んで、その作戦を思いついた」）が示されない限り、無意味である。あるいは、その日の天気についての説明（「さわやかで太陽が照っていた」）は、事象をより鮮明にしてくれるがゆえに、語りの中に受け入れることができる——遠く離れたたとある国の天気を記述しても奇妙なだけだろう。ここでもまた、関連事象は語りによって選択されることがわかる。すなわち、生じた事象を何であれ語りに含むことができるわけではない。語りに含むことができるのは、物語の結末に関連した事象のみなのである。

### (3) 事象を並べる

ゴールが明確化され、関連する事象が選択されると、それらの事象は、普通、順番に並べられる。オンク (Ong,

1982) が示しているように、事象をどのような順序で並べるのが適切か(事象の重要性に応じて、価値観に応じて、時宜性に応じて、など)は、歴史とともに変化する。現在、最も広く用いられている序列の慣習は、事象を時間軸に沿って単線的に並べるというものである。例えば、ある事象は、フットボールの試合のはじめに起こったとか、試合の中盤や終わりに生じた事象に先立って起こった、などと言われる。このような事象の直線的な配置は、事象の実際の流れと一致しているかのようには思われがちではあるが、それは、実際の事象そのものと、その記述を理解可能にする表現規則とを混同しているからだ。結局のところ、直線的な時間的序列は、記号システムに内的整合性を与える慣習の一つであり、現実世界そのものによって要請されるものではない。それは、一見、人の目的とは関係なく、事実そのものを反映しているように見えるかもしれない。しかし、例えば、時計が刻む時間は、「歯科医の椅子に座って過ごす時間の経験」を話そうとするならば、有効ではないだろうし、物理学の相対性理論や季節の移り変わりを記述しようとするときにも、適切ではないだろう。単線的な時間的記述が自明に見えるのは、バフチン(Bakhtin, 1981)の言葉を借りれば、われわれは「単線的」時間依存症にかかっているのだ——それは、「事象を表現するための基本的な枠組み」(p.380)、すなわち、事象間の時間的・空間的関係を規定する慣習である。「昨日は今日より前である」ことが自明に見えるのは、われわれの文化が時間依存症にかかっていることの帰結なのである。

#### (4) 同一性を安定させる

語りにおいては、登場する人物や事物は、時間軸上で連続した固有の同一性をもつ。例えば、ある瞬間に悪役として登場した主人公が、次の瞬間には英雄となるのでは劇にならないし、意味不明なバカなことばかりをする主人公が、突然、何の脈絡もなく、天才の実力を発揮するのは不自然である。つまり、個人や事物は、物語作者によっていったん定義されると、その物語の中で同一性を保持し、役割を果たすようになる。もちろん、こうした一般的な傾向には明らかな例外もあるが、その例外のほとんどは、同一性の変化そのものを説明しようとする物語である——カエルがどうやって王子様になったのか、貧しい青年がどうやって金持ちになったのか、などのような。そこでは、個人や事物の変化をもたらした原因(例えば、戦争、貧困、教育など)がもち出され、仮の同一性が「本当の同一性」に、劇的

に取って代わられたりもする——信頼していた教授が、実は、放火魔であることがわかった、のように。しかしながら、一般的に、物語の中では、人格がでたらめに変化することは許容されていない。

### (5) 因果の連鎖を作る

現代の基準によれば、理想的な語りは、結果に対する説明を含む。よく言われるように、「王が死に、次いで王妃も死んだ」では物語の萌芽にすぎない。「王が死に、悲しみのあまり、王妃も死んだ」となってはじめて真の物語となる。リクール (Ricoeur, 1981) が述べているように、「語りという織物の中には、説明が織り込まれていなければならない」(p.278)。説明は、普通、常識的に見て因果的に関連している事象を選択することによってなされる。例えば、それぞれの事象は、それに先立つ事象の産物のはずだ。「雨が降ってきたから、屋内に避難した」「彼の行動の結果、彼は級友と会うことができなかつた」、など。しかし、このことは、普遍的な因果概念があり、それによって事象が選別されることを意味するのではない。因果形式にいかなる事象が含まれるかは、歴史や文化に依存している。実際、たいの科学者は、因果性についての議論を、ヒューム流のものに限定しようとしている——社会哲学者は、理性を人間行為の原因とみなすことを好み、植物理学者は、因果の目的論的形式を好み、というように。しかし、いかなる因果モデルを好むかは別として、事象が語りの中で因果関係で結びつけられると、物語がより物語らしくなる。

### (6) 区切りを示す

ほとんどの物語には、はじまりと終わりを示すシグナルがある。ヤング (Young, 1982) が述べているように、語りは、いつから「物語世界」が始まるのかを示す、様々な規則的装置によって、「組織化」されている。例えば、「昔々、あるところに……」「……について知っていますか」「ここに来る途中何が起こったか、想像できないでしょう」「どうしてこんなに幸せなのか、話してあげよう」などの言い回しは、すべて、語りが始まることを聞き手に知らせるシグナルである。語りの終わりも、同様に、あるフレーズによって締めくくられるかもしれないが、「以上です」「そういうわけです」、必ずしもそうである必要はない。例えば、ジョークの最後の笑いは物語世界の終わりを告げるし、物語の

要点を記述すれば、物語世界が終わることを示すことができる。

以上の六つの基準は、多くの文脈において、語りに基本的なものではあるが、その文化的・歴史的依存性を述べておくことは重要である。例えば、メアリー・ゲーゲン (Mary Geegen, 1992) が自伝についての研究で述べているように、男性は、女性よりも、「正しい物語を話す」という一般的な基準を遵守しようとする傾向が強い。女性の自伝は、複数の終点をめぐって構成され、しかもどの特定の終点とも無関係な題材が含まれることも多い。また、文芸実験におけるモタニストの急増とともに、純文学が満たすべき形式上の要件も緩やかになった。ポストモダンの著作においては、語りは皮肉にも自己言及的なものとなっている。すなわち、語りこそが表現戦略の中核をなす一方、その戦略の有効性は語りによってしか保証されないという自己言及的構造が採用されている (Dipple, 1986)。

日常生活の中の語りが、これらの基準を満たしているかどうかは、非常に重要である。見てきたように、語りがこれらの基準を満たすことは、自己の記述に現実感を与える上で、不可欠であるように思われる。ローゼンワルドとオックバーク (Rosenwald and Ockberg, 1992) は、次のように述べている。「人が自分の歴史をどのように語るか——何を強調し何を省略するのか、立場は主人公なのか犠牲者なのか、その物語は語り手と聞き手の間にどのような関係を生み出すか、など——、これらはすべて、その個人がまさに自分自身の人生と主張するものを形成する。自分についての物語は、単に、自分の人生について誰か(あるいは、自分自身)に語るためのものではない。それは、アイデンティティを形成する手段でもある」(p.1)。ベネットとフェルドマン (Bennet and Feldman, 1981) は、「法廷における現実の再構成 Reconstructing Reality in the Courtroom」の中で、研究協力者に、四十七の証言——実際に起こった事象についての証言と、架空の作り話——を与えた。評定の結果は、研究協力者が実際に起こったことの記述と架空の記述とを区別できていないことを示していたが、架空ではなく本当の記述と研究協力者が信じていた記述の分析は興味深いものであった。すなわち、研究協力者は、物語が語りの基準を満たしているほど、それを本当の記述と判断していたのである。つまり、本当だと信じられた物語は、終点に関連する事象が支配的で、それら事象の間の因果的結びつきがより強いものであった。さらに、リップマン (Lippman, 1986) は、法廷証言が終点に関連する事象を選択して

いる程度、ある事象と他の事象の因果的結びつき、事象の通時的順序を変化させるといふ実験を行った。その結果、上述の語りの基準を満たすほど、その証言は理解可能であり、合理的な証言とみなされる傾向があった。つまり、日常生活においては、自己についての語りは、必ずしも上述の基準を満たしていないかもしれないが、特定の状況下では、それらの基準はきわめて重要となる。

### 第3節 様々な語りの形式

われわれは、これら語りの慣習を使うことによって、人生を首尾一貫したものにし、それに方向性を与えている。人生は意味を獲得し、生起する事象は理解可能なものとなる。語り形式のあるものは、文化の中で広く共有されている——頻繁に使われ、人々に熟知され、様々な場面で用いられる。ある意味で、こうした語り形式は、「自己についての語り」の可能性の源泉と言える。では、このような共通の語り形式について、どのような説明ができるだろうか？

ここでの問題は、前節で述べた基本的物語の問題と似ている。アリストテレスの時代以来、特に哲学者と文芸理論家は、物語を記述する共通の語彙を発達させようとしてきた。しばしば言われるように、すべての物語がそこから生まれるような、基本的物語の集合があるのではないか、というわけだ。人々が語りを通じて生きているのであれば、基本的な物語群は、ライフコースを限定するだろう。

二十世紀における最も包括的な物語論の一つは——アリストテレスの影響を強く受けたものであるが——、ノースロップ・フライ (Frey, 1957) によるものである。フライは、語りの四つの基本形式を提唱している。それぞれは、自然をめぐる人間の経験、より具体的には、四季の展開にルーツをもつ。まず、春に花が咲き始める経験は、コメディという物語を生じさせる。古典的伝統においては、コメディには挑戦や脅威が含まれるが、それらは社会的調和を生み出すために克服される。コメディは、そのエンディングが幸福なものであっても、ユーモラスである必要はない。対照的に、夏の日の自由と静けさは、劇形式としてのロマンスという物語を生み出す。この場合、ロマンスは、主役が



挑戦や脅威を経験し、一連の苦闘の末に勝利を得る、という一連のエピソードからなる。ロマンスでは、人々が愛し合う必要はないが、しかし、大団円を迎える点で、コメディと似ている。秋は、夏の生と来るべき冬の死の対照を経験する時期であり、悲劇という物語が生み出される。そして、冬に、未だ実現しない期待や夢の失敗への自覚が高まると、風刺という物語が重要な表現形式になる。

フライによる語りの四類型とは対照的に、ジョゼフ・キャンベル (Joseph Campbell) は、何世紀にもわたって無数の物語を生み出してきた、唯一の「単一神話」を主張している。単一神話は、無意識の精神力動に根ざしており、個人的・歴史的限界を克服し、人間を超越的に理解することができた英雄に関するものである。キャンベルによれば、様々な地方における英雄物語は、心の教育に中心的な役割を果たしている。われわれとしては、単一神話がロマンスと似た形式であることを指摘しておく——すなわち、否定的事象（試練、恐怖、苦難）の後に、肯定的結末（啓発）がまつている、という点で。

しかし、こうした基本的物語の探求は、美学的には面白いが、満足のいくものではない。なぜならば、なぜ語りのパターンが限定されているのかについての説明がないからだ。そして、モダニズム作家（ジェームス・ジョイス、アラン・ロブグリエら）やポストモダニズム作家（ミラン・クンデラ、ヨルジュ・ベレックら）による実験が成功し、伝統的語りが崩壊したことを考えると、語り形式が普遍的に特定の規則に従うという見解には、疑義を唱えざるをえない。本章で提示する文化的観点によれば、物語には、決まりきった形式があるわけではなく、事実上無数の形式が可能である。様々な歴史的時点において、好まれる語りの形式は変化するが、その変化は、社会的交流に依存する。すなわち、カッコいい仕草や服装、あこがれの職業が時代とともに変化するように、「自己についての語り」の形式も変化する。語りの構造についての第2節の議論を敷衍すれば、現代において一般的な「自己についての語り」の形式を理解することができる。

見てきたように、物語の終点は、価値を担っている。つまり、「勝利」、「恋愛の成就」、「宝物の発見」、「論文の受賞」などは、好ましい物語りのエンディングとして使用され、その評価軸の対極には、「敗北」、「失恋」、「富の浪費」、「仕事の失敗」などがくる。そうであるならば、物語の結末を導く様々な事象（事象の選択と順序づけ）を、二次元の詳

価値空間上に位置づけることができるだろう。すなわち、価値あるゴールに近づくと、物語はより肯定的なものとなり、失敗や幻滅に近づくと、否定的な方向へと推移する。要するに、すべての語りは、評価と時間の二次空間上に、グラフ化して表記することができる。このように考えると、語りには三つの基本的形式があると見ることができよう。

第一は、**安定的語り**と呼ぶべきものである。これは、ゴールや結果への個人の軌跡が基本的に不変であるように、対象を結びつける語りである——人生はただ進行し、よくも悪くもならない。図8・1に示されているように、安定的語りは、評価軸上のどのレベルでも展開しうる。例えば、フランスの領域では、個人は、「私は以前と同様まだ魅力的だ」と語り、マイナスの領域では、「私は失敗の感情につきままとわれ続けている」と語るだろう。さらに見て取れるのは、これらの語りの要約は、それぞれ、未来への固有の含意をもっていることである。すなわち、前者においては、個人は、近い将来においても自分が魅力的であり続けると語るだろうし、後者においては、状況にかかわらず、今後とも失敗が続くと語るだろう。

さらに、**安定的語り**とは対照的な二つの語り形式が存在する。一つは、**上昇的語り**である。これは、評価軸上での推移が、ときとともに上昇するように、諸対象を結びつける語りである。もう一つは、**下降的語り**である。これは、評価軸上での推移が下降するような語りである。上昇的語りにおいては、人生は楽天的に記述される——何事もほとんどよくなる、というように。それは、例えば、「私は内気を克服することを学び、よりオープンでフレンドリーになろうと思う」のように表現される。対照的に、下降的語りでは、次々と下降していくような描写がなされる——例えば、「私は、自分の人生は決して思うようにならないと思う。私の人生は、次から次へと大きな不幸に見まわられてきた」のように。これらの語りは、将来への方向性を示してもいる。すなわち、前者はさらなる上昇を、後者はさらなる下降を予期させる。

明らかに、これら三つの語り形式——安定的語り、上昇的語り、下降的語りは、評価軸に関する推移の可能性をすべて網羅している。したがって、これらは、より複雑な語りの基本的な形式とみなすことができる。これら単純な基本的形式は、理論的には、無限の語り形式を生み出す可能性をもつ。しかしながら、述べてきたように、ある歴史や文化における語りの可能性の範囲は限定されている。そこで、現代における主要な語り形式のいくつかを見ていこう。